

第 65 回 国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

小平市花小金井南中学校 1 年

王 沐瑶

課題①

あなたが考える平和とは何か。そのために何をすべきか。

副題

風月同天一違いは壁でなく光に

小学校四年生のとき、家族で日本からカナダに引っ越した。母は「多文化社会だから楽しい経験がで
きる」と励ましてくれたが、現実は違った。両親は中国出身だが、日本で育った私は、日本文化を身につ
けていた。それでも、礼儀で白人にお辞儀をすると自信がないと驚かれ、日本的な控えめさも他の同級
生に、はっきり言えないと笑われた。私は文化を隠そうとし、受け入れられないと思い込み、見えない壁を
作ってしまった。私を変えたのは、多文化が交わる祭りや交流の場だった。日本文化祭で、浴衣姿の外国
人が声をかけ、金髪の青年が太鼓をたたいていた。チャイナタウンでは、高齢者が太極拳を披露し、黒い
肌の子どもが中国語で詩を朗読した。その姿に気づいた。文化の魅力を示すことこそ、人とつながるき
っかけになるのだと。違うからこそ面白いという空気の中で私は勇気を出してクラスメートに声をかけた。返
ってきた笑顔に、胸の壁が消えた。この気づきから、私は多文化社会の本当の姿を考えるようになった。
平和は、最初からあるのではなく、互いの努力に支えられているのだ。その努力とは衝突を避けることで
はなく、自分の文化を示し、相手の良さを学ぼうとする姿勢だ。違いは壁ではなく財産になり得るのだ。だ
から日本に戻ってからも、この視点で出来事を見るようにした。奈良の鹿をめぐる動画が拡散されると、
一部の行動が「中国人＝マナーが悪い」という印象に広がった。京都でも観光客との摩擦から民泊が規
制された。否定的な出来事が重なると、経済や交流の機会までも失われてしまうー私はそれを残念に思
った。こうした現象は、誤解が積み重なって偏見という壁に変わる例だ。文化を一方的に負のイメージで
語れば、SDGs16 が目指す平和で包摂的な社会とは逆の姿になる。だが互いの良さを学び合えば、壁
は薄れ、共に成長できる。衝突の多くは知らないことから始まるからこそ、知ろうとする努力と尊重が欠か
せない。私にとって平和とは、争いがない状態ではなく、互いに理解し、尊重し、壁を越えて共に生きるこ
とだ。それはSDGs16「平和と公正」に重なる。外国人が地域の習慣を尊重し、地域の人も背景を理解

すれば、抵抗感も小さくなり、その積み重ねこそ真の共存であり平和だ。では、私たちが平和のためにできることは何か。私は、四つの実践を考えている。第一に、今はSNSや YouTube など、誰もが自分の文化を発信できる時代だ。私も日々の体験や学びを SNS で発信し身近な実践を続けたい。もしオンラインに「世界のチャイナタウン」のような場があれば、国や地域を超えて文化に出会えるだろう。第二に、学校で文化あるあるカードを作り、異文化のすれ違いをユーモラスに共有することだ。小さな笑いからでも、偏見はほぐれていく。第三に、家庭で異文化を迎えることだ。今年はアメリカから同世代の子をホームステイで受け入れ、日本と中国の文化を紹介し合った。交流の温かさは国境を越えて信頼を生む。第四に、国境を越えた学びを発信することだ。来年は中国の老人ホームでボランティアを行い、日中の福祉の違いを学び、二言語で報告する予定だ。共通の課題の知見共有は小さな橋になる。これらはすべてSDGs 16に通ずる実践である。平和は国際会議ではなく、日常の選択から育つのだ。私はアメリカ国籍を持ち、中国出身の両親のもと日本で育ち、カナダでも暮らした。偏見を感じたこともあるが、その経験は弱さではなく強さだ。異なる文化の間に立ち、壁を超える努力の価値を知ったからである。中国の言葉に「山川異域、風月同天」がある。国や文化が違っても、同じ空の下で月を仰ぎ風を感じられるのだ。だが、それは自然と訪れるのではなく、互いに違いを認め、良いものを示し合い、尊重し合う積み重ねがあって初めて実現する。その意志を持ち、文化が集まっても衝突しない社会を築く一人でありたい。